

### 23. 防災対策の量的な構想から脱却する必要がある

表題の意味は、これまでの防災対策や防災計画を完遂すれば十分なのかということと、早期に機能を獲得できるのか、ということへの危惧を感じるところにあります。防災で大事なことは人命であるわけで、人が行動することが防災につながるということを改めて感じます。

最近、2011年東日本大震災で被害を受けた岩手、宮城、福島3県へ津波浸水範囲の見直しとの報道がありました。これまで心配がないと思っていた人々にとっては大変な衝撃を感じています。また、各県で発表された津波想定によれば避難所の約1割も浸水するというような結果になりました。いずれもこれまでの科学技術的知見によるものですが、災害への対応への見直しが課題となっています。かといって、各市町村がさらに標高の高いところを開発して街づくりをするかということになると、ほとんど不可能に近いことになると思います。つまり、モノで安心、安全を得ることには限界があるのではと思います。

まずは早期に安全なところへ避難することになれば、住民の正しい知識のもとで、周辺の広域での避難域を確保するということが適当だと思います。それには、広域の市町村での受け入れ、協定を結んでおいて、避難ルートの整備、住民の防災意識の醸成に重点を置かなければならないと思います。そのような観点から、既存のインフラの強化や発災時のスムーズな非常時体制が組まれるような組織の見直しや強化を構築する必要があります。

もちろん、現状での対応も必要で、例えば完璧ではなくとも水の勢いを抑制するような構造物を構築する、高い建物への避難を可能にする付帯設備への補助、避難ルートの改修など同じ防災の視点でのインフラ整備も必要になります。そして、住民が地域の災害リスクを風化させずに継承していく努力も、暮らしの中の営みであるということ意識する、意識させる取り組みが必要で、行政なども地域住民を主役にした構想を実践していくことが必要だと思います。

と同時に開発行為を制限する特別警戒区域を進捗させないといけないと思います。これまでのあいまいな土地利用や既得権的なものも見直すという抜本的な災害の視点からの見直しの着手を急がなければなりません。住民への理解が進まないことが多いということも、住民に対する危機感がないことへの対応も同時に進めていく必要があります。我々が受け継いできたと思われる、自然と共生するというのを肌で感じて、移動して暮らすという、自然に生かされているというような意識が身についたDNAを再起させることが大事なような気がします。